

研究課題	コミュニケーション力を高め、学び方を広げるオンライン交流
副題	～交流の新しいステージ 非日常から日常へ～
キーワード	小規模校・オンライン交流・コミュニケーション力
学校/団体名	公立札幌市立定山溪小学校
所在地	〒061-2302 北海道札幌市南区定山溪温泉東4丁目308
ホームページ	https://www.jozankei-e.sapporo-c.ed.jp/

1. 研究の背景

本校は札幌市で唯一複式学級をもつ小規模校であり、児童は保育園から10年以上をほとんど同じ仲間です。本校では少人数である利点を生かし、児童の実態に合わせた個別最適な学びを意識して授業を行うことができる。また、同じ仲間過ごすことは「言わなくても分かってくれる。自分を受け入れてくれる。」という安心感の下で学習できるという利点がある。しかし、隣接校とも10kmほど離れているという立地のため、同世代の児童と関わる機会が必然的に少なくなってしまう。そのため、多様な考えに触れたり大集団の中で傾聴したりする経験に乏しい。結果、「相手の話に注意を向けて意図をくみ取ろうとする。」ことに苦手意識をもつ児童が多く、コミュニケーションに課題があるという形で表出している。少人数で活動しているため、他者の話を聞いていなくても、話し手が復唱したり、相手に合わせて説明し直したりすることが可能なため、傾聴する力が育ちにくいからであると考えられる。そこで、傾聴力を育成することでコミュニケーション力を高めることができるのではないかと考え、傾聴力の向上を目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究では、傾聴力を育成することで、コミュニケーション力を高めていくことを目指す。そのため、まずは「傾聴力」とはどのような力なのかを担任で話し合い、「相手の意図を理解し、自分の言葉で説明できる力。」と定義し、目指す子ども像への道を設定した(図1)。傾聴力を育成できる場面は様々であるが、児童の実態を踏まえて、1.既知の相手であること、2.同世代で共通の話題をもちやすいこと、3.相手の発言に集中できる場で交流できること、を目標達成のために必要な環境と考えた。特に交流場面に関しては、本研究の定義である「相手の意図を理解」するために、“対面の場合はその場の雰囲気ですぐに会話が進むが、オンラインでは会話内容を明確にして進行する傾向が強まる。(田中・森, 2022)”という先行研究からオンラインがよいと考えた。そこで、これらの条件に合致する姉妹校とのオンライン交流を研究場面とし、他の学習と関連させながら進めることとした。以上のことから、本研究ではオンライン交流がコミュニケーション力の向上に及ぼす影響及びその効果を明らかにしていくことを目的とした。

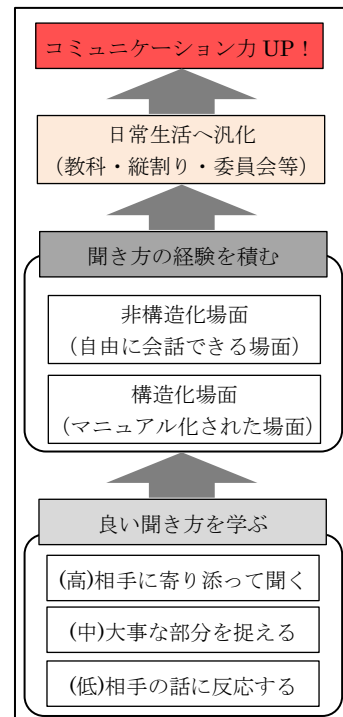


図1 目指す子ども像への道

3. 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月	○授業の約束・話の聞き方(実践①)	○観察記録、目標・振り返りシート
6・7月	○構造化場面での主な交流(実践④) ・低学年…七夕のお願い ・中学年…自己紹介をしよう ・高学年…寒い土地の暮らし	○観察記録、目標・振り返りシート 初回の目標は児童の実態に合わせて教師からいくつか提示し、その中から児童が選択した。
9月	○少人数交流(実践⑥) ○プレゼンテーション(実践⑤) ・中学年…定山溪の魅力を伝えよう ・高学年…修学旅行報告会	○観察記録、目標・振り返りシート ○スライド、目標・振り返りシート
10月	○授業の約束・話の聞き方(実践①)	○観察記録、目標・振り返りシート
11月	○少人数交流(実践⑥) ・中学年…好きなものを紹介しよう ○プレゼンテーション(実践⑤) ・低学年…歯磨きの大切さ(劇発表) ・3～6年…歯と口の健康について ○休み時間交流(実践⑦)	○観察記録、目標・振り返りシート ○スライド、目標・振り返りシート 中学校や地域へYoutubeでLive配信を実施し、感想をもらう。 ○観察記録、動画からの分析。
12月	○「聞く力」の自己評価(児童・教師) ○少人数交流(実践⑥)	○アンケート結果の比較。(結果②) ○観察記録、目標・振り返りシート 9月のデータとの比較。(結果①)
1月	○少人数交流(実践⑥)	○観察記録、目標・振り返りシート
2月	○休み時間交流(実践⑦)	○観察記録、動画からの分析。 1回目のデータとの比較。(結果③)
3月	○研究の総括、次年度計画	○教師によるデータの整理・分析

*取組は研究に関わる代表的な場면을抽出している。また、交流の事前には、目標や活動内容、機器の動作チェック、事後には反省と次回の予定を教師同士で確認する時間を設定している。

*各内容の丸数字は“4.代表的な実践”及び“5 研究の結果”の丸数字と対応している。実践②、実践③に関しては、通年で実施しているため経過への記載は省略している。

4. 代表的な実践

4-1. 傾聴力を高めるための指導

実践①～全校で良い話し方・聞き方の方法を学び、聞き方の共通理解を図る。

本校の児童は日常的に関わる相手が限られていることから、話し手の意図をくみ取りながら話を聞くという経験が少ない。そのため、「そもそも良い聞き方を知らないのではないか。」と予測を立てた。そこで、学習を始めるにあたり、4月に『授業の約束』という全校学活の時間を設定し、その中で「聞き方」の要点を説明して、

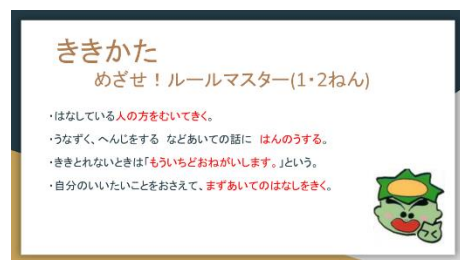


図2 聞き方のポイント

全員で共通理解することから始めた。聞く時に気を付けることや、各学年の発達段階に応じた目標を提示することで、学習時間に意識して取り組むことができるようにした(図2)。10月にも再度学活の時間で確認し、3月の年度末にはキャリアパスポートと合わせて聞き方を振り返ることで、年間を通して各教科・行事等、交流の時間以外でも聞き方を意識できるようにしている。

実践②～交流に集中するための環境調整をする。

会話に集中するためには、まず相手の話が明瞭に聞こえている必要がある。そこで、研究予算から児童数分のヘッドセットを購入した。姉妹校にも同じものを貸与し、双方同じ環境で交流ができるようにした。また、少人数で交流する際にはグループごとに教室も分けることにより、自分達のグループ以外の会話が聞こえないようにした。その結果、会話内容が「聞こえなかった。」という児童からの訴えが減少した。また、**機器の音声トラブルなどで活動が中断することが無くなった**ことで、交流時間を保障できたことや、機器や音声のトラブル対応の時間を教師が各グループでの活動の様子を見ながらアドバイスする時間にできたことが、結果的に成果となった。

実践③～毎時間の目標を明確にして、スモールステップで傾聴力を育てる。

傾聴力を高めるために発達段階に応じた目標を提示したが、毎時間全ての目標の達成を目指すことは難しい。また、見通しがもてない中で児童が自分で課題や目標を設定しても実態に即したものになり得ないことが多い。そこで、最初は教師が課題を設定し、達成のため

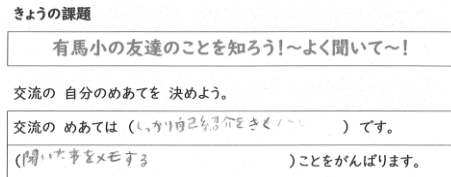


図3 ワークシートより抜粋

の**目標や手立てを児童一人一人と話し合っ**て一つに絞りワークシートに記入するようにした。交流が進み見通しがもてるようになると、発達段階や学習の進行に合わせて自分で目標を決められるようにするなど、児童自身が自分で学習を通して何をを目指すのかを考えられるようにした。

実践④～会話の順序・形式の決まった「構造化場面」で傾聴の基礎を学ぶ。

良い聞き方を知り、それを実践することで傾聴力が身に付いていく。その際、学んだことを活用して上手くいったという成功体験が次への意欲や、身に付けた力の活用・汎化につながる。そこで、基本的な交流場面ではテーマや内容、進行の順番などを決めて質問や回答なども事前に考えられるようにしておく。このマニュアル化された場面を構造化場面と定義した。事前に内容が分かっていることで「この場面ではこの力が使える。」と児童が認識し、成功体験を積むことができると考えた。



図4 交流場面の様子

交流の進捗に合わせて少しずつ構造化を減らし、会話の自由度を上げていくことで様々な状況に対応して聞く力を活用できるようにした。

実践⑤～総合的な学習の時間でのプレゼンテーションで、話し手・聞き手両方の視点を学ぶ。

総合的な学習の時間を中心に他者に自分の伝えたいことを分かりやすく話す練習をした。分かりやすく話すためにはどのように伝えたい内容を組み立てればよいのかを考えたり、友だちの発表を聞いてアドバイスをおくり合ったりする学習を積み上げることで、話し手の視点から聞きやすさを知ることができるようにした。前期には3・4年は地域の魅力発表、5・6年は修学旅行の報告会を実施し、後期には全校で歯科医師会と連携して歯

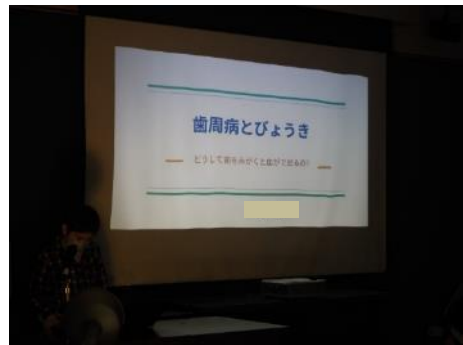


図5 和歯 8020World 発表の様子

と口の健康について調べたものを発表した。この学習は「和歯 8020World」という名称で、コロナ前は地域の健康促進行事との合同開催であった。現在は授業公開日として、歯科医師会、保護者、地域の方を招待して実施している(図5)。また、当日は主に中学生に向けて YouTube Live によるオンライン配信を実施した。これらの発表を通じて、中学生や保護者、地域の方からの感想をもらい、聞き手がどのようなことに注意を向けて聞いているのかを知ることで、自分が聞く場面では何に気を付けるとよいのかを知るためのロールモデルとなるようにした。

4-2. 培った聞く力を生かす場面の設定

実践⑥～少人数交流で会話を促進し、多様な場面での傾聴力を高める。

オンラインでもある程度人数が多いと一人当たりの発言時間が減少することや「誰かが答えてくれる。」という思いから、聞くことに集中しにくくなってしまふことがあった。そこで、ブレイクアウトルームを設定し、学級をさらにいくつかのグループに分けて3・4人程度の少人数で交流する時間を設定した。その中で、テーマを決めて話し合う時間と児童自身が話題を決めて話し合うフリートークの時間を設定した。3・4年生は11月に好きなこと紹介というテーマで少人数のフリートークの時間を設定した。児童の感想にはこれまでよりも**具体的・肯定的な記述が多く、満足感の高い交流**となった。5・6年生では1回目にビブリオバトルを実施し、おすすめの本を紹介し合った。その後、外国語での交流会や日本文化を発信しようなどのテーマを設定し、テーマから派生する形で話し合う活動を積み上げ、1月にはテーマも児童自身が決めるフリートークの時間を設定した。交流後には「フリータイムが楽しかった。」「早く次の交流がしたい。」などの記述や発言が多く(図6)、**交流を楽しみにしている様子が見られた。**

とちゅうでおなかがいたくて1人あんまり
発表がまけなかつたのかごん独人でした
有馬小学校の人たちは、大きな声で聞きと
りやすかったと11回くねましたかい
私じしは大きな声で話せなかつたし
はやくちになってしまいました
フリータイムがしたかったです
さんのパレフレックの
すすはらりをはじめてきました
おまほうじ

図6 振り返りの記述

実践⑦～培った傾聴力を生かす非構造化場面「休み時間の自由交流」。

テーマも進行も自由にできるこの場面を「非構造化場面」と定義し、これまで培ってきた傾聴力を生かす場面として実施した。11月の交流では、緊張した様子が見られたが、当日の天気・気温や教室内に映っている設備のこと、途中参加の児童の自己紹介などを会話内容として少しずつ打ち解けていく様子が見られた。しかし、会話時間を計測してみると教師が会話をつなぐために話をしている時間が最も多く、全時間の3割強を占めていた。2回目の交流でも教師が会話を繋ぐ割合が同程度で多かったものの、それぞれのクラスのマスコットや興味のある本、食べ物などをもってきて画面に映すことによってそこから会話が発展する場面が多くなった。また、会話を中断させずに明確に反応し会話に入る手段として、答えを紙に書いて提示するなどの工夫が見られた。相手の話に対応し、「話を聞いていること」を様々な方法で表出するなど、培った傾聴力を場面や状況に合わせて生かそうとしていた。



図7 休み時間交流の様子

5. 研究の成果

結果①～聞く姿勢の変化（児童の振り返りから）

表 1. 9月と12月の交流場面を振り返った記述の変容

n=5(人)

	1人当たりの文数	1人当たりの自立語数	1人当たりの具体的な単語数
9月7日の振り返りの記述	3.2	19	6
12月21日の振り返りの記述	4.2	32	12.6
p-Value(Choen's d)	p=0.034(d=0.83)	p=0.047(d=1.38)	p=0.033(d=1.36)

6年生5人の振り返りの記述を形態素解析し、一人当たりの文章に含まれる自立語の数及び自立語の中から具体的な行動・様子を表わした単語を抽出した。具体的な単語は、担任間で話し合っ
て決めた。それぞれの平均の差を検定($\alpha=0.05$)したところ、文数、自立語、具体的な単語数
全てで $p<0.05$ 、 $d>0.8$ となり、有意な差が認められた(表1)。少人数で交流する経験を積むこと
で、他者の話を聞く時に何に注目するとよいのかが分かり、エピソード的な内容が記憶に残り
やすくなったのではないかと考えられる。

結果②～聞く姿勢の変化（アンケートから）

表 2. 聞く力に関するアンケートより

n=10(人) n=4(人)

	児童平均	教師平均
今年の初め(4月)と比べて聞く力が身に付いてきたと思いますか。	4.3	4.0

12月にこれまでの学習を振り返る一環として3年生以上の児童と教師にアンケートを実施し
た(表2)。5段階評価で、数字が多いほど肯定的な評価となる。児童・教師ともほぼ全員が聞く
力が身に付いてきていると回答しているなど、学習の成果を実感している結果となった。加えて、
身に付いたと感じた具体的な学習場面は、交流の時間よりも、委員会活動や縦割り活動など、異
学年での話し合いが必要な時に実感している児童が多かった。日常生活への汎化を実感し、そ
れが自分自身への肯定的な評価につながっていると考えられる。

結果③～聞く姿勢の変化（休み時間交流での会話の様子から）

グラフ 1. 休み時間交流の時間内訳



表 3. 休み時間交流の会話応答数及び時間内訳の比較

	話題の数	会話応答数	教師のつなぎ	子ども同士の会話	(会話無し)沈黙	質問への回答準備	その他
11月の交流	5	4.16	31%	22%	11%	23%	13%
2月の交流	9	4.11	36%	27%	2%	29%	6%
	独立性の検定(χ^2 検定)		p-Value(Cramer's V)		p=0.034(v=0.228)		

児童から「もっと交流したいので早く次の日程を教えてください。」と聞かれた活動であった。
話題数は時間内に出た話題の数、会話応答数は一つの話題で何回応答があったのか、所謂「会話
のキャッチボール」がどの程度連続して続いたのかを表わしている。話題数、応答数を比較する
と、11月の交流は挨拶、自己紹介も含めて話題数は5で、平均応答数は4.16回、2月の交流は
話題数が9で、平均応答数は4.11回であった。総時間はほぼ同じにも関わらず、2月の方が応
答回数と同程度でも話題数が倍になっていることから、相手の話に素早く反応できるようになり、

会話がテンポよく進んでいったと考えられる。時間内訳は11月、2月ともに約12分で同程度のため、時間内に占める内容の割合で比較した。どちらも教師のつなぎ時間が最も多く、教師の発話をきっかけに児童同士の会話が進む場面が多かった。しかし、2月の会話内容は本の紹介や食べ物についてなど、児童から自発的に発生したものが多くなった。また、時間内訳に独立性の検定(χ^2 検定、 $\alpha=0.05$)をしたところ $p<0.05$ 、 $v>0.1$ となり、11月と2月の交流に有意な差が認められた。最も大きな差は沈黙時間の減少である。児童からの**自発的な話題提起や話題数の増加により会話のテンポが上がったことが沈黙時間の減少につながったのではないか。**

結果④～聞く姿勢の変化（日常生活への汎化を担任の見取りから）

聞き方の学習に取り組むことによって、委員会の話合いでは「それって〇〇ということ？」など、相手の意図を正しく聞き取ることができたのかを確認してから活動に入るなど、単に聞くだけでなく、相手の話を自分が理解できているか確認するために「聞き返す」場面が見られるようになってきた。また、異学年交流では高学年が低学年の話聞き、それを受け入れた上で再度提案するなど、**相手や状況に合わせたより良い関わりを意識して活動する様子が見られた。**

6. 今後の課題・展望

少人数での自由な交流を中心に、相手の意図を理解するために真摯に聞こうという傾聴力の高まりが見られた。また、異学年交流や委員会活動など、日常生活の様々な場面で傾聴力が汎化された様子も見られた。しかし、反応の工夫や聞き返すなど、傾聴力のうち「相手の意図を理解」しようとする力の高まりは示唆されたが、聞いて理解したことを「自分の言葉で説明できる」までには至っていないため、聞いた内容を再構成し、自分の言葉で表出できるようになることで、傾聴力を高め、よりよいコミュニケーションをとれるようになることが今後の課題である。

7. おわりに

本実践を通して、学校全体で協力して研究へ取り組めたこと、児童が最後まで高い意欲を保って学習できたことなど小規模校の良さが前面に現れたことも成果であった。本研究を進めるにあたり、パナソニック教育財団の皆様、サポーターの長谷川先生、チームの皆様、そして姉妹校の神戸市立有馬小学校の皆様がこの場を借りて深くお礼を申し上げたい。

8. 引用・参考文献

- ・稲垣忠 学校間交流学習における共同性の研究
<http://inalab.net/special/copo/dron/> （最新閲覧日：2022年12月26日）
- ・井上亜衣子・綿巻徹・内野成美 児童の授業参加行動を高めるためのユニバーサルデザインによる授業づくり 長崎大学教育実践総合センター紀要, 14, pp.97-106
- ・田中彰吾・森直久 間身体性から見た対面とオンライン会話の質的差異 こころの科学とエピステモロジー, 4巻(2022)1号 2-17
- ・山田貴子 能動的な聞き手を育成する「聞くこと」の重層的な指導 全国大学国語教育学会 第138回2020春季大会研究発表要旨集 p105-108